

佐藤友彦師所蔵 九冊本間狂言「項語間」

飯塚 恵理人*

要旨

この九冊本からなる間狂言本は、現在和泉流狂言方佐藤友彦師が所蔵されているもので『国書総目録』第六卷「能の本」の「間狂言の本」に山脇元康氏所蔵として載るものであり、以前に故表章氏が御覧になった際、「内容的には大蔵流のもので、貞享松井本、筑波大学本と並び、大蔵流の間狂言本として最古に属する内容ではないか。」と筆者に言われたことがある。この間狂言本についてはすでに第四冊まで翻刻しており、今回第五冊目の翻刻を掲載させて頂く。内容に関する吟味は後日とし、とりあえず本文を翻刻・紹介させて頂きたい。

(凡例)

底本に忠実に翻刻することを心がけたが、読解の便宜を考え、以下の点について改めた。

- 1、旧字体は原則として新字体に改めた。
- 2、私に句読点を施した。
- 3、能の曲名は《》で囲んだ。

4、底本の書き入れは（ ）で囲み、その書き入れの該当部分に示した。

5、底本の墨消ちとなっている部分は【 】で囲んだ。

「項語間」 九

(目次)

(目録) (103) 《項羽》 (104) 《舟橋》 (105) 《錦木》 (106) 《女郎花》
(107) 《鶺鴒》 (108) 《阿漕》 (109) 《野守》 (110) 《遊行柳》 (111) 《鶺鴒》
(112) 《融》 (113) 《熊坂》 (114) 《小塩》 (115) 《雲林院》 (116) 《伏木曾我》 (117) 《猩々》 (118) 《諸社》 (119) 《獅子》 (120) 《信夫》 (121) 《草薙》 (122) 《泣不動》 (123) 《求塚》 (124) 《鐘馗》 (125) 《松虫》

(本文)

(103) 《項羽》

か様に候者ハ、うがうの渡守にて候。今日ハそれがしが渡しばんにに^(エ)あたりて候間、罷出乗人のあらば渡さばやと存る。いや成草薙達。むかひゑおこしやらばこして参せう。何とむかひよりこなた

ゑこしたるとおしやるか。いや／＼さやうてハおりやるまひ。惣而此所の大方にて。我ばんをも人にしらせす。人のばんをもそれかしがゑ存ぜぬ大方にて候。今日ハそれがしがばんにて候間、それがしハかし申さぬが扱ハかた／＼わいつわりを申さるゝか。是はきどく成事を承候。此所にてわたそうする者ハおぼゑぬがふしんに候よ。いかやう成事にて候ぞ。是ハ思ひもよらぬ事を尋給ふ物かな。我等も左様の事くわしくは存ぜず候さりながらかたはし聞及びたるとをり物語申さうするにて候。去程に項羽高祖のたゝかひハ八ヶ年の間に七十余度に及び候。然共たゝかいごとに項羽うちかち給ふといゑとも七十余度の御合戦に項羽うち御まけ被成、がいかのじやうにこもり給ふ。かんくん是をかくむ事たうまちくいのごとくにて御ざ有たると申。然どもせめやぶる事もならず候ところに高祖の方よりうたを作り、四面にそかのこゑたててうたふやうだひ物すさまじくきこゑければ扱ハ我うんめいつきぬるとてぐしと申きさきに名残をおし御涙をながし給へハぐしもわかれをかなしみ涙をながし項羽にさきだつてみをなげむなしくなり給ひたると申。扱項羽ハ八万余騎をめしぐしかこみをうちやふつて南をさしておち給ふ。かんぐんすせんになをもつておつかけ給ふ處にさん／＼に御成有此うがうまで御出候へハうがうの長ていハ舟をこしらへ待奉る。項羽に申やうハかうとうはせうちなれどもすまんにん有所なれハ急東ゑ御わたり有、かさねて兵をめしぐし二度本意をとげ給へと申せハ、項羽のたまふやう我かうとうよりおほくの兵をめしぐして出しに、今ハ其者一人もなし。何の面目有てかうとうの者にまゐゑんやと仰られたると申。誠御うんもつきけるかや、項羽のめしの御馬ハばううんすひとて一足に千里をかくる名馬なれ共、ひぎを折、きなる涙をながし一足もゆかず候程に御馬もうがうの長のていに給てそれよりかち太

刀になり取てかゑし、数万人の内御身にも数多きすをかうむりあたりを御らんすれば高祖の兵にりよばとうといふ者有。是は項羽古より御存じの者なれハ「汝ハ我こしんなり。我くび取て高祖に奉り名を高代に上よとの給へどもおそれてちかづき申さねハ、項羽ミづから御くびかきおとしむなしく成給いたると申。又びじんさうと申は、ぐしのしがいをつきこめたるつかよりも生出たる草花なれハとてびじんさうと申ならハして此野べの名草にて候。惣而さいぜんも申ごとく念此にハ存もいたさず、先我等の承たるハかくのごとくにて候。是ハふしきなる事を仰候物哉。扱ハさいぜんの渡守ハうたがふ所もなき項羽の御ばうしんにて御ざあらうすると存候。それをいかにと申に、さいぜんも申ごとく此渡しハはんにいたし渡し申候。其上此あたりに左様の者ハなく候が、項羽の御ばうしん舟人と成てあらハれ出給ひたると存なる間ぞくざい出家にハよるまじい程に項羽の御ばだひを御用あれかしと存候。さやうに候は、かさねて参り御用のことを承らうするにて候。心得申て候。

(104) 《舟橋》

是ハ此あたりに住居する者にて候。承候へば、いづくのきやく僧やらん橋のほとりにやすらうて御ざ候よし申。いかやうなる御方にて候ぞ。参て見申さばやと存る。此間ハ隙なきにより爰元へ出たる事もなく候。先なくさゞ一つに罷出て候。されハこそ是に御ざ有よ。是ハいづくよりの御方にて候ぞ、とひ申さばやと存る。いかにきやくそう、れうじ成申事にて候が、是ハいづくよりいづかたゑ御出候へハ此所にハやすらうて御ざ候ぞ。是ハ思ひもよらぬ事を尋給ふ物かな。我等も所にハ住居いたし候ゑども左様の御事しかとハ聞も及す候。さりながらおきやくそう此所はしめて御一見あり所のこかを尋給ふに存せぬと申もいかゝにて候間、およそ承り及びたると

おり物語申さうするにて候。去程に、事のやうをひき申さねハ御ふしんに御ざあらうする。あつまぢのさ野の舟橋とりはなしとも鳥ハなしとも二せつに御ざ有。しさいハいにしゑ此所に忍びづまあこがれたる者の候ひしが、女ハ此河よりむかひの者、男ハこなたの者にて有しに二人の心中あさからず御ざ候て、かならず行すゑまでもあひかわるまじいなどゝたがいにかくそく仕り、しのびくゝに此橋のほとりにて出合候ところに、彼りやうにんのおやども此由を聞てたがひにしかるべきゑんをも申合て有に、かゝるふるまひきたのかぎりなるとて彼者どものとうかななき人くゝをたのミ色くゝけうくん仕候へどもさらにがてんをいたさず夜なくゝ此橋にて出合申候程に、二人のおやどもれうけんにおよばすして色くゝしあんのいたしとかく此橋があればこそかれら出合候へ。さらハあふことのならぬやうにいたさうすると申て、橋のいたを二間あまりとりはなししておき申たるを彼者どもそれをハゆめにもしらすしていつものごとく夜ふけ人しづまつて兩人ながら橋の本ゑ立出、先おつとやがて女のがけを見付、されハこそむかひに見ゆると悦び、むかひの女ばかりにめをつけそろそろばしりにはしる程に彼はなしたる所をふミはづいてたつとおちてほしうもなひ水を思ふさまのふでむなく成て候。又むかひの女ハおつとのはまりたるもしらすしてまさしくおつとのむかひに見ゑたるがおそく来るはふしん成と思ふて是もそろくゝとあゆミよりさまにきやつもふミはづいてむなく成て候處に、あかつきがたにりやうにんのおやども聞付てきもをつぶしはしり出て見申せどもかげもかたちも見へ申さぬ程にせめてしがいなりとも見申度とて色くゝさがし申せどもさらに見ゑ申さず候間、にわ鳥を舟にのせてこぎまわればかならずしがいのうゑにて鳥がなくと申たる程にさらハにわ鳥をとりよせよと申候へども此佐野のれうに

ハ中くゝにわ鳥がなく候間、爰をもつて御うたにもあづまぢのさの、舟橋鳥ハなしとも、又はしをとりはなしたるに依てとりはなしともよミ申され候が、いづれも是ハ両せつにて有と申つたゑ候。惣而さいぜんも申ごとく妻ハ存もいたさず候へども御尋にて候間、あらくゝかたつて候が只今の御尋ふしんに存候。是ハふしぎなる事を仰候物かな。扱ハそれかしすいりやうにハおきやくそう是まての御出をうどんげと存、いにしへのしのびづまふうふの者どもあらハれ出て橋のすゝめをいたしたると存候。それをいかにと申に、只今物語申たるとく、橋をひきはなしたるゆゑにおちてむなくなり候により橋のすゝめを申たると存候。さやうの御事も御きやくそうたつとき御方なるにより御弔にもあつかり度思ひあらハれ出、ことばをかわしたるとすいりやう仕て候。おきやくそうも左様に有つべしくおほしめさハ、しばらく此所に御逗留有て、彼ふうふの者の跡を御弔あれかしと存候。それハちかごろしゆしやうに候。御逗留におゐてハ我等も此あたりに宿をもつて候間、見くるしく候へどもお宿を申、何にても御用の事あらハ承らうするにて候。心得申て候。

(105) 《錦木》

か様に候者ハけふの里に住居仕る者にて候。今日ハけふの市にて候程に罷出、よからうり物あらハかいとらばやと存。いつもけふの市ハにぎやかに御ざあるがさだめて今日もにぎやかにあらうする。さればこそいつもと申ながら今日ハ一人にぎやかに見ゑ候。いや是に見なれ申さぬ御そうの御ざ候がいづくよりいづかたゑ御とおりに被成候御方にて候ぞ。是ハ思ひもよらぬ事を御尋にて候物かな。我等も此あたりにハ住候へどもさやうの事いつかうふちあんないの者にて候。さりながら御そうの御尋被成るに、所に有ながら存ぬと申もいかゝにて候間、大方所におゐて申つたへたとおり物語申さ

うするにて候。先此里をけふの里と申候。とりわけ此所の市をけふの市と申候。去程に此市よの国里になき物をうりかい仕候。それハ錦木ほそぬのと申物にて候。是に付物語の候。其子細ハ、惣て人間のなんによ夫婦のなかだちと申ハ、皆其者のとうかんなき者かしんるひかよきゑんを以て申さため候が、此所の大方にて、錦木と申ていゝるどりたる木を作ておつとの方より我ふうふに成べきと存る女の門にたておくを、又女もふうふに成べきと思ふおつとのたてたる錦木をばやがて取入、あふまじきと思ふおつとのたてたるは取入す。是が則ふうふのなかだちの木にて候。しかれハいにしゑ此所にと有おつとの有しが有女を思ひかけて彼錦木をかざりすまし女の門にたておき候處に、彼女のちゝはゝしかるべきゑんにてもないと存けるか、其錦木を取も入す候間、おつとハいよゝゝあこがれ其錦木も程ふりあしく成候間とりかゑゝゝたておき申せども女ハうちにほそぬのをのミをりいて取も入す、すでにミとせに成しかば彼おつと其せいりきもつきけるかむなく罷成て候。さ有に依て彼女彼由を聞て、扱ハか程まで我を思ひ入てミとせまでたてたる錦木をむなくなしたる事のかなしさよとなげいて、又彼女も其まゝむなくしく成て候。さやうに候間、兩人の者のちゝはゝ其有様を見て扱は両方ともにか様に思ひあひたるをしらすして二人ながらうしなひたる事のふびんさよとなげきかなしめどもかへらぬ事なれハぜひに及さざあらハ是よりハふうふのとりをきをいたさうするとして、ミとせたておきたる錦木と彼二人の者を一つにつかにつきこめ、今におゐて錦木づかと申候。又ほそぬのと申ハ鳥のはにておりたるぬのにて候。其ぬのをおり出したる子細ハ、いにしゑ此所にて、わしゝくまたかといふものあれておさなき者をこくうにつかんでうせ候間、有人の申事にハ、いやたゝ鳥のはにてぬのをおりてぎせたらハとらぬ事もあ

らうすると申されしかハ、げにもと思ひ、我もゝと鳥のはをこしらゑぬのをおりきせけれハ、それよりはたとりやミ候間、子どもにまじないのためきするぬのなる程に入てうほういたし愛もとにてとりあつかふぬのにて候。さいぜんより申ごとく大方此所にてとりきた申ぶんかくのごとく承及びて候が、思ひもよらぬ御尋ふしんに存候。是ハきどく成事を承り候物哉。それハうたがふ所もなくいにしゑの錦木たてたる二人の者のゆふれいにて御ざあらうすると存候。其子細ハけふの市にたち申者どもにさやうの者どもハ有まじく候。惣てか様の事も御そうたつとくましますにより御弔にもあづかりたく思ひふうふの者どもあらハれ出たるとすいりやう仕て候。左様にも候ハ、しばらく此所に御逗留有かのふうふのあとを念頃に御弔有いづ方ゑも御とをり被成候へかしと存候。御逗留にて候ハ、たつとき御僧と見ゑ申て候間、おやど成ともいたしたく候間、見くるしくハ候へども御逗留の間ハお宿を申さうするにて候。心得申て候。

(106) 《女郎花》

か様に候者ハ八幡の山下に住居する者にて候。誠此所の女郎花ハ名草にて候へども見る事もなく候。ことさら此ごろさかり成由申候間、罷出見申さばやと存る。此おとこ山の女郎花ハさすが名草なれハほどとをきかたよりも見物に参申に、所に有ながら見申さぬハ心もなき事にて候。いや是にお僧の御ざ有が是ハ何方よりの御僧にて候ぞ。是ハ思ひもよらぬ事を御尋にて候。我等も所にハ住候へども左様の事ハ久敷やうにとりきた申候程にしかとハ存ぜぬ事にて候。さりながら所に住居なれハかたはし聞及たる通り物語申さうするにて候。去程にいにしゑ此所におのゝ頼風と申たる人の御ざ有たるが、せうの子細あつてながゝゝさいきよ被成たるに都とハ申せど

もほど久敷御逗留なれハ、さびしくも御ざ候^ごつるかさる御方とよりあひ給ひしに、其時ハたゝかりそめのやうに御ざ候へども、のちにハたにことなくちぎりをこめられかならずゆくすゑまでもあひかわるまじいなどゝたがひに御やくそく被成たると申さる間、頼風ハ此八幡系御下り候が、世上隙もなき御身なれハ久敷ごみんしんもなく候程に、有時都の御方此八幡系下り申され頼風の方系御出有、是まで尋参りたる由申されけれハ、折節頼風山上に御入あつて御留主の事なれハ、内よりもことあらゝかなる返事を申さるゝ。かの御方ハあきればて御留主の返事とハゆめにもしり給ハす、扱は何事もいつわりの身にて有物を、女のはかなさハ誠ぞと心得て是まで尋てきたりたるくちおしさよ。此上ハいのち有てもせんなしとて放生河系身をなげられしをあたりの者どもおどろきさわぎ、やがてとりあげ候へどもはやむなく成申され候。とかく申内に、頼風山上より御下り候が、放生河のほとりに人おほくこぞり候を、頼風ふしんに思ひたちより御らんじけれハ、都にてあひ給ひたる御方成程にせんびをくひ給へどもかなわす。扱あるべきにあらざれば此のべのどちうにつきこめ、頼風も程なく身をなげむなく成給ふをとりあげ彼女づかのそばにおしならべてつかにつきこめ則おとこづか女のづかと申て今にかくのごとく申ならハし候。又女郎花と申ハ、彼上らう身をなげられし折節、やまぶぎいろのきぬをめしたるを其まゝつかにつきこめしに、其いろがくさとなりて生出たるに依て此所の女郎花は名草にて候。大方我等の聞及たるハかくのごとくにて候が、何と思召て御尋にて候ぞ。是ハふしん成事を仰候物かな。惣而此山中に左様にこかなどを引て物語申さうする者ハおぼへ候ハぬが、ことさらつかのほとりにてすがたを見うしなひ給ひたらハ、うたがふ所もなき、頼風の御ばうしんにて御ざあらうすると存候。御僧も左様にお

ほしめさば頼風の跡を念比に御弔被成何方ゑも御とをりあれかしと存候。御逗留の間ハ此あたりにやどをもつて候間、見ぐるしく候へどもお宿を申うするにて候。心得申て候。

(107) 《鵜飼》

たれにて渡り候ぞ。御宿ハやすき事にて候へどもかたゝの様成わうらいの人きんぜいと大ほうをおき申て候間、かなふまじにて候。いやゝ中ゝなり申まじく候。あらせうしや。お宿がな参せう。いかに申。あれに見ゑたるかわさきの御だうゑおりやつておとまりやれや。其御だうゑハかわよりも夜なくゝひかり物があがると申程に心得ておとまりやれや。や、ねそひ事をいふ人じや。夜前おうらいの人の宿をかり度と申されたれども、此所の方にて候間かわさきの御だうゑおしゑやりて候程にちとあれゑ見廻申さうするにて候。夜前のお僧ハいまた是にはつたとしておしやるよ。あふ。中ゝ宿を参らせたくハ候つれども大方にて候間ぜひに及す候。是ハ思ひもよらぬ事を承候物かな。さりながら鵜つかひの事ハそれがしハよく存じて候間、さあらハ語て聞せ申さう。惣而此いさハ川上下三里が間かたきせつしやうきんだんの所にて候。然る所に有もの夜ゝしのびのぼつて鵜をつかひ候間、此所のわかき者どもだんかういたし、是ハにくき事にて候。ぜひとつかまへて高代のいましめせひばいいたさうと申て、有夜ミな申合て川のみまりゝに待うけい申候ところに、彼鵜つかいいつものごとくつかふてのほるをねらう者共ばつとよつてつかまゑて見たれば此川下にいわおちと申所の鵜つかひで御ざつた。彼者申やう、さやうのせつしやうきんだんの所ともしらすつかふて候程にきやうかうの事ハ中ゝつかひ申まじひ。此度ハまつびら御めんあれと由。それがしが申事ハ、いやゝさやうにわかき者どもにあらけなく申そといふて、先彼者にゆる

りとこしをかけさせてやすませておけと申て、扱わかき者ども二大やぶへ竹をとりやつて、其竹をわらせてひし／＼とあませてひろげておかせて、扱其上に彼鶴つかいをゆるりとねさせてかたはしからくるり／＼とまいて六所七所いわせて、おもきいしを四つ五つゆいつけていさわ川の一のふかき所ゑふしづけといふ物にしてころして候が、是ハ日本一のよい一見を申たと存るが何と思召候ぞ。先鶴つかひのはてたるはかくのごとくにて候が、いかやう成子細により御尋にて候ぞ。是ハきどく成事を語給ふ物かな。扱はうたがふ所もなき鶴つかいのぼうしんあらはれて一への御ゑかうをもうけうすると存、姿をまゑがうりきの鶴をつかふて御目にかけたとすひりやう申候。しからハ彼者の跡をそと御弔あれかしと存候。さあらハ我等がやう成者もいしをひらうて参せうするにて候間、一石に一字を御書付有て御弔あらうするにて候。さやうに候ハ、御逗留の間は大ほうをやぶつてお宿を参せうするにて候。心得申て候。

(108) 《阿漕》

か様に候者ハ、此あたりに住居する者にて候。此程ハかなたこなたと隙なきゆゑ遊山いたす事もなく候。あまりか様にきをつめてもいらさず事にて候間、先今日ハうらへ出、心をなぐさまばやと存る。久敷此あたりゑ出申さねハ、あらたまりたるやうにおぼゑて一だんとおもしろく候よ。あらふしぎや。是にお僧のぼうぜんとして御ざ候。是ハいづくより出給ひたる御僧にて候ぞ。中／＼此所の者にて候がいかやう成事を御ふしん被成度候ぞ。されは其事にて候。我等も此あたりにハ住居仕候へども左様の事しかとハ存ぜず候。先およそ聞及びたるハ此浦の惣名を一見の浦とやらん申なと、承て候。去程に阿漕か浦と申子細ハいせのうミ阿漕かうらにひくあミもたびかさなれハあらわれずするとやらん御うたによませられたるに

より阿漕か浦と申など、承り及て候。又阿漕か浦と申ハ人の名によせての事と申人も御ざある。それをいかにと申に、たとへハ此浦のうをおとり大神宮の御くうに上申により、つねの時ハせつしやうきんだんにて中／＼むさとうをお取申事ハ成申さす候。しかる所に此浦に阿漕と申されうしの御ざ有たるが、夜／＼浦にしのびてあミをひき申に、しはしハ人も存ぜず候が、たびかさなりけるか、所の者ども是を聞付、扱もにくい事かな。あつはれ此者をとらゑていましめたきと申て、有時此浦の若者ども申合爰かしこにちつて彼あミ引を待かけ候所に、阿漕ハ夢にもしらすして又いつものごとくしのびてあミを引所を、まちまふけたる事なれハねらう人／＼ばつとよつて其まゝとらゑてひごろのねんりきこそとゞいたれとていかにもよくいましめて、扱いかやうにしてころすべきぞと色／＼だんかう申候へハ有人の申事にハ此浦のうをぬすみたる程に此浦ゑふしづけにせよと申て、先大成竹を取よせそれをわらせてすにあませ、扱彼阿漕をくる／＼とまいておもきいしをくくりつけ此浦ゑしづめて候により阿漕か浦と申など、承て候がか様の子細にても御ざあらうするかとの申事にて候。惣てせつしやうきんだんの所おほしとハ申せども彼者ハ大神宮ゑの御くうにあがるうをおぬすみたるによつてふしづけにあひたるととりさいたすといふとハ申せども念比にハ存ぜず候がいかやう成子細により御尋被成て候ぞ。是ハハごんごうだんふしぎ成事を仰候者かな。惣而此あたりに左様の者ハなく候が、扱ハいにしゑの阿漕と申たる者あらわれ出、此所のやうだひ御物語申たるとすいりやう申候。かやうの事もお僧たつとき御方なれハあらはれ出て御弔にあづかり度存、ことばをかわしたるとすいりやういたし候間、しばらく御逗留有、彼阿漕を弔うかめて御とをりあれかしと存候。御逗留にて候ハ、あたり近所に宿をもつて候間、見ぐるしく

ハ候へどもお宿を参せうするにて候。心得申て候。

(109) 《野守》

是ハ此あたりに住居する者にて候。今日ハ罷出さくまふを見舞、又春日野のあたりゑ参り、野守のかゞみを見て心をなぐさまばやと存る。我等ごときの者のあさましきにハ、あけくれ野にふし山にふすやうにいたいてとせひをおくり遊山仕る事もならず候。いや是成おきやくそうハ何方ゑ御とおり候へハ是にやすらうて御ざ候そ。かしこまつて候。是ハ思ひもよらぬことをお尋にて候。我等も此あたりにわ住候へども左様の事くわしくハ存ぜず候。さりながらおよそ聞及びたるとをり物語申さうするにて候。去程に野守のかゞみと申ハ、是成水を申候。其子細ハ御らんぜられ候ごとく、いかにもきれい成水なれハ、我等ごときの野をもる者どもがたちより水かゞみを見申ゆゑに則野守のかゞみと申候。又はしたかの野守のかゞみと申ハ、いにしゑ此所にてみかりを御さた被成しに御たかを見うしなわれ、かり人の数多あなたこなたを御尋なさるれども御たかのゆくゑ御ざなく候間、かり人たちもあきれはて、やすらい給ふ所ゑ、一人の野守参りたる程に彼野守に御たかの行ゑをハしらぬかととひ給へハ、御たかハ是成水のそこに御ざ有と申たりけれハ、かり人たち何しに水のそこに御たかの有べきぞと一どにどつと御わらいなされたると申が、是ハ尤の御事にて御ざ候。しかれどもあまりふしぎなる事を申程にたちより御覧ぜんとてかり人数多よりて見給へハ、あんのごとく水のそこに御たかが見え候間、ふしんをなしよく見れハあたりちかき木にこいをとつてい申。たかが此水にうつつてまさしくそこに有様に見ゑ候程に、各々悦ひやがて其御たかをすゑとつて御帰り候。其様躰を御哥に、はしたかの野守のかゞみゑてしかな。思ひおもわすよそながら見んとかやうにあそばれたると申。

又誠の野守のかゞみと申ハ、あれ成つかに鬼神すんで、其鬼のもちたるかゝみを野守のかゞみと申など、仰らるゝ御方も御ざ候。其鬼もひるハ我等ごときの者の姿と成て此野を守、又夜るハ鬼にてかゞみを守など、申傳ゑ候。惣而最前も申ごとくハしくハ存も致すおよそ聞及たるハかくのごとくにて候が只今の御尋ハいかやう成子細にて候ぞ。ふしんに存候。是ハかゝるきどく成事を仰候物哉。惣而此あたりに左様の者ハ御ざなく候が、御きやくそうたつとくましますにより是成つかの鬼神野守のすがたと成てあらハれ出、御ことばをかわしたると存る間、しばらく此所に御逗留有、かさねてきどくを御らんあれかしと存候。御逗留にて候は、かさねて御見舞申さうするにて候。心得申て候。

(110) 《遊行柳》

か様に候者ハ、此あたりに住居する者にて候。此程ハあなたこなたと隙入、何方ゑも罷出申さす候間、今日ハふるつかの柳のあたりゑ参、上下のたび人を見て心をなぐさまばやと存る。ひまさへあらハ遊びに出申さうする事成どもとかくあなたこなたと致、のんきをする事もなく、たゞうき世のならひうらめしく候。いや是成お僧ハいづくよりいづかたゑ御出候へハ、此所にやすらふて御ざ候ぞ。是ハ思ひもよらぬ事を御尋にて候物哉。我等も此あたりの者にてハ候へども左様の御事ふち安内の者にて候。さりながら御尋も御僧のふるさとゑの御物語に被成度思召御尋にて御ざ有と存る間、我等のおよそ聞及びたるとをり物語申さうするにて候。去程に是成柳の子細と申は、仁王七十四代鳥羽の院のほくめんのさふらひに、田原藤田秀里より八代め佐藤右衛門の大夫秀清の御子に佐藤兵衛乗清と申御方の御ざ有たるがほつしんをおこしなれば出家めされ、其名を西行法師とつき給ひて諸国をしゆぎやうなされ、むつの国ゑ御げかうの

時、此所を御とをりなされ候。ころハ【神】(水) 無月の時分にて有たるが、此川下より此へんを御覽すれハ川ぞいにくち木の柳の御ざ候を御らんじてさだめてすゝしくあるらんとて、此へんにきたり給へハ、あんのごとくこかげより風すゝしくふき申候間しばらく此柳の下にやすらひて此柳にむかひ一しゆのうたをあそはされたと申。其御哥ハ道のべにしミづながるゝ柳かけしはしとてこそ立とまりけれとかやうにあそはされたと申。さすがいなかと申ながらかゝる哥人のことばにあづかる程の木にて御ざ候へばとて今にふるつかの柳と申てミナ人名木のやうに申ならハし候。されハ最前の御哥ハ、新古今に入たるやうに承り及ひて候が、しかとは存じもいたさす。いづれも柳ハ子細ありさうにミゑて候間、はじめて御とおりのかたゝハふしんを被成る御事にて候。去程にむかしハあの道御ざなくしてあれに見ゑたる一村のすこしこなたの川ぎしより是成道ゑとをり申たるがさやうに御ざありたれハこそせんねん遊行上人おくゑ御下向の時も此ふる道を御とおりと申つたへ候が、さりながら、しかとは存ぜず候。惣而我等も最前も申ごとくしかゝとハ存もいたさず候へども、御上人の御尋にて候間、およそ聞及びたるとをり物語申上て候が、何と思召是なる柳の事御尋被成て候ぞふしんに存候。是ハごんごだうだんきどく成事を仰られ候物かな。扱ハそれかしのすいりやうにハ、うたがふ所もなく、くち木の柳のせいにて御ざあらうすると存候。誠草木心なしとハ申せども心の御ざ有がひつちやうにて候。それをいかにと申に、只今仰られ候にハふるつかの本にてすがたを見うしなひ御申候由承候へハうたがひもなき柳のせいにて候。かゝるたつとき御上人ゑことばをかわし何事もふつくわにいたり度存あらハれ出て御道しるべ申されたとすいりやう仕候間、誠にさかしき申事にて候へども、しばらく此所に御逗

留被成、御経をも御どくしゆあり、ふつくわにいたらしめて御とおりにあれかしと存候。御逗留にて候ハ、見くるしくハ候へども此あたりに宿をもつて候間、御宿を申、又所の者どもにも忝御札を給はれと申さうするにて候。ちかごろにて候。さあらハ先御いとま申候。
(III)《鵲》(《鵲飼》)のせりふと同前。但しすさきの御たうという。
はけ物なり。

先鵲のむなしく成たる子細ハ、仁平三年に、君御のふとならせ給ふ。其やうだひハ、たう三条の森の方より夜半ばかりとおぼしき時分にくる雲が一村御てんのうゑへおほいおびゑ給ひてより御のふしきりに有しかハ貴僧高僧をしやうじしゆゝさまゝの御きたうども候へども其しるしさらに御ざなかりたと申。さあらハうらなわせられうするとて、其時のはかせをめしてうらなわせ御申あれハ、はかせ參、うらかたに引合申やう、是ハ化生の者のわざにて候間、ぶしに仰付られ、いさせられたらハしかるべしと申上候程に、さあらハいさせて御覽あるべしとて頼正のしたくゑ勅使たてられければ頼正二ゑのかりぎぬにしげどうの弓にとがりやを取ゑらうどうにハとうたうみの国の住人にいのばやたと申てすぐれたる者一人めしつれ御てんの大床にしこうして有たるにくろくもが一村御てんの上ゑじつとおほいたる所を頼正是ぞと思ひ、南無八幡大ぼさつと心中にきねんして、とかりやつがふてよつびいてはなれたれハ、手ごたゑがして、しばらくうんちうをあなたこなたへあるくと見ゑしが、大床ゑずでいどうとおちて候を彼いのはやたつつとよつて藤四郎のかさねあつたるかたなをもつてつく程にゝ十八刀ついたと申が、まづはいかい事にてハ御ざなく候か。けにゝ今のハあやまりて候。九刀にてさしとめ火をとぼし見たれハ、おそろしき事にて御ざ候ぞ。色々の者があつまりて君に御のふをかけたると申。先かしら

がさるのやうにあつて、だうハたぬきのやうで、おがくちなわ、足手がとらのやうにあつてなくこゑが鶴と申者ににたると有て、其名を鶴と名付。およそにしてかなわじとて、うつを舟につくりかうでよど川さしてながされたと申。しばらく此なだにとまりて御ざあるなど、申候。先我等の承たるハかくのごとくにて候。是ハごんごだうだんの事を御尋被成る物かな。扱ハ此だうゑあがるげけものハうたがひもなき其時の鶴のしうしんにてあるべし。かやうの事も御僧の御心中たつとくましますによりわざをもなさず御申にあづからうすると思ひこゑことばをかわし申たると存候。しばらく御逗留有、鶴を弔うかめて御とをり候へ。御逗留にて候ハ、かさねて御見舞申さうするにて候。心得申て候。

(112) 《融》

か様に候者ハ此あたりに住居仕る者にて候。此間清水ゑ参らす候程に、今日ハ清水ゑ参らばやと存る。毎日にも参度存すれども隙なき者の事成ハ、左様にもなりかたく候。や、是に見なれ申さぬ御僧の御ざ有が是ハ何方へ御出候へハ是にやすらうて御ざ有ぞ。是ハ思ひもよらぬ事を承る物かな。我らも此あたりにハ住居仕候へども念頃ハ存ぜず候。さりながらお僧の御尋ならるゝ間、所におゐて承り及びたるとをり物語申さうするにて候。去程に融のおとと申たる御方ハ仁王五十二代嵯峨の天皇のすゑの王子にて有たと申が、仁王五十六代清和天皇の御宇ぢやうぐわん十四年八月に左大臣ににんぜられ、仁和三年に十一位にのほり寛平元年にハ御年六十七にてれんしやのせんじをかうむり、誠にくわんるほうろくまでたぐひすなくゆふにやさしき御方にて渡らせ給ひたると申が、六条河原の院に御ざ有たるにより河原の左大臣とかうし奉り、すだいの御門に仕ゑ御申被成たると聞ゑ候。されハ融のおととハ、御一しやうの間

よにすぐれ、御物ごのミにて色く様くの御あそびかすをつくし給ふにより何かめづらしき御なくきミおと思召、折ふし御前にて有人の申されけるハ、名所きうせきおほき中にも陸奥のちかのしほがまのてうぼよにすぐれおもしろき名所なるといふて其けいきくわしく御物語被成けれハ、おゝ聞召御下向有て御らんじ度思召どもあまりにおんごくの御事なれば御れうけんおよばせ給ハす。さあらハ都の内ゑうつし御覧有べきとて、ゑづをもつて此所に塩がまをつくり賀茂川の水を引くだし色くのやり水せんすひつき山のやうだにおびたゝしく被成、うしほゝハ難波津・しきつ・たかつ、三つのうらよりうしほゝくませ此所にてやかせられ、おびたゝしき事ハいともおろかに御ざ有たと申。されハ、しほくミのかすも浦にてしほくミあくる者千人、はこびゆきちがふ者千人、爰にて山ゑわけ入薪をこりうしほゝたれてやく者千人以上三千人の人足を持て毎日いとなむにより、塩屋のけむりなどのけしき、さながら御哥によませらるゝにすこしもたかわす。是程おもしろき事ハあるまじきとて一しやうきよゆふのたよりに被成、あれに見ゑたるをまがきが嶋とかうし、あの嶋ゑ御ざ有、御しゆゑんの御ゆふらんさまく有し折節、音羽の山のミねよりも出たる月のまがきが嶋の森のごずゑにうつてかゝやく有さまたぐひすなくおもしろき御事なれハ、都の者ともきせんくんじゆをなして袖をつらねくびすをついで見物いたしたると承り候。誠やらんころハ神無月晦日がたに菊もみぢの色付千草に見ゑておもしろきころ、此所ゑみこかんだちめなどおわしまさせられて夜もすがら御しゆゑんの被成、ちけいのすぐれたる心ばへの御哥ども各々あそばしけれハ、在原の朝臣ハ皆人くによませはて、塩かまにいつかきにけんあざなぎにつりする舟ハ爰によらんとかやうによませられたる御哥ことにしゆしやう成由承る。誠たぐ

ひなきやうだいといふながらしやうじやひつすいのことわりにて年月のすぐるハ程もなくとおとゞかうじ被成てよりたれ有て御跡をさうぞくしてもてあそぶ人もなければハ浦ハ其まゝひしほと成て今にはやあれば名のミばかりにて御ざ候。つらゆきとやらんの御哥に、君まさで、けふりたへにししほがまのうらさびしくも見え渡るかなと、あればたたるていをよミ給ひたると申。御僧の御前にてかたはらいたき物語申て候が、只今ハいかやうなる子細により御尋にて候ぞ。ふしんに存候。是ハきどく成事を仰らるゝ物かな。惣而此あたりにて左様にことまかに物語いたさうする者ハおぼえ候ハぬが扱ハ御僧たつとき御方にて御ざ有により、融のおとゝあらハれ給ひ御ことばをかわされたとすいりやう仕候。それをいかにといふに今も月の夜のめい／＼としておもしろき折節は、はまをならし塩をくミ、むかししほをやかせられたるやうだいを御さた有と申。さやうの事も我等ごときの者ハおがミたる事もなく候が、うゑつかた又ハたつとき御方の御めにハさだかに御覽せらるゝと申が、うたがひもなきたつとき御僧と存る間、しばらく此所に御逗留有、御経をも御どくじゆ被成、かさねて融のおとゞの誠の御姿を御覽ぜられ、其後何方へも御通あれかしと存候。御逗留にてあらハ、見ぐるしくハ御ざあれども御宿を参せうするにて候。心得申て候。

(113) 《熊坂》

か様に候者ハ美濃の国あかさかのしゆくに住居する者にて候。今日ハ青野が原え出心をなぐさまばやと存る。久敷爰元へ出たる事もなけれハめつらしうおぼゑて候。いや是成御僧ハ何国より何国より何方えおとをりなさるれハ是にハやすらうて御ざ有ぞ。是ハ思ひもよらぬ事を御尋有物かな。我等も此あたりにハ住居いたし候へどもきんねんさやうの者の有たる事ハなく候が、夜打かうたうと仰られ

候に付、思ひ出して候。いにしゑ熊坂の長半と申て此あたりにてしゆ／＼様／＼のあくたういたし、むなしくなり申たる人の有たると申が、さやうの人のことにて候ハ、くハしく存せず候へども御所望ならハ語つて聞せ申さうするにて候。先熊坂の長半と申たる人ハ賀がの国より出られ、国／＼のぬす人をあつめ我大性に成てあくたうをしたる人にて有たると申。惣而長半もはじめハしやうじき成人にて候つるが、たゞかりそめに人の物をぬすミとり、それよりぬすミハもとでも入す、おもしろき物じやと思ひそめて、爰かしこにてあくたうをいたされけれども一度もふかくをとらずして、むま・うしまでひきとり、あれ成山きハにかくしむまやをこしらゑ、さまをかゑてならびの市にてうり候に、そつともしらぬやうにいたされたと申が、今におゐて其あとが御ざ候。しかれども此所にてはてたるやうだいハ、いにしゑ都に三条の吉次信高と申てこかねをあきなふ人、毎年しゆ／＼のたから物をあつめもちて、おくゑ下り候を、彼長半それをよく存、都を出る時よりもめ付を付、此青野が原にて取べしとて此はうゑくつきやうのぬす人七八十あつまり其まゝ夜打をかけ申處に、うんのきわめのかなしさハ、吉次がもとに牛若殿の御ざ候をしらすして、我も／＼とこミいり候を牛若殿こわきにかまゑおもてをむくる程の者をのこりずくなにうちころし給ふ。中にも熊坂の長半ハ大かうの者なれハひじゆつとつくしたゝかゑどもかわすしてついにうたれたると申。此あたりにおゐてあくたうをいたしたるにより今に人の申出すことにて候。只今ハいかやう成子細により夜打がうだうしたる者をハ御尋候ぞふしんに存候。是ハきどく成事を御物語候物かな。それハうたがふ所もなき熊坂の長半のはうしんにて候べし。いたハしき事なればしばらく此所に御逗留有御経をも御どくしゆ有、長半が跡を弔ひて御通あれかしと存候。御逗留

にて候ハ、かさねて御用承らうするにて候。心得申て候。

(114)《小塩》

此所の者と御尋ハ、いかやう成御用にて候ぞ。其事にて候。我等も此所にハ住居仕り候へども左様成御事ハ我等ごとき者の存る事にてなく候間事くハしくハ存ぜず候。さりながら御尋にて候程におよそ承り及たるとおり物語申さうするにて候。去程に先此大原小塩の明神と申ハ本地春日の大明神にて御座有など、申。かんゐんの左大臣ふつぐのきやうと申ハ、藤原うぢにて御ざ候程に、南都ゑ御参けい有度おほしめされ候へども長にひまなく仕ゑ御申候により御参けいかなわす候程にちよくをうけかせう三年に春日大明神を此大原ゑ御くわんじやう有て是ゑ御さんけい有。則藤原うぢのみをやのしんとあがめ御申有。四月上のうの日と十一月中の子の日御神事の御ざ候。是ハ藤原うぢの中よりきさきにたち給ふ御方のとりおこなわせらるゝ御神事と承及て候。又もんとく天皇仁寿元年にはじめてりんじのまつりをとりおこなわせられ候。又二条のきさきも藤原うぢにて御ざ候により此大原へ行慶成給ひたると申。其時在原の中性業平も御ともにて御ざ候。去程に御供の人く此所にて御車のうちよりもおひきを参らせられたると申。在原の業平ゑハきさきのぎよいを参らせられ候。其時業平の御哥に大原や小塩の山もけふこそハ神代の事も思ひいづらめとか様によませられ候よし申つたへ候。此哥ハ大かたハいせ春日の御ないしやうにけふの御参けいをうれしくおほしめされんとよみ給へども、した心ハ、きさきに御たちなき時、業平しのびてかよひ給ひし事を思召わすれ給ハすぎよいをくだされてかたじけなきことをとをくいになさんとして神代の事とよませられたるなど、御さたどもにて候。去程に又一せつ申ハ、業平を此小塩の明神にいわひ申されたと申つたへ候。さあるに依て業平は

いかやうなるけしんにて御ざ有ぞと尋申せハ、小塩の明神。又小塩の明神の御本地はいかやう成御事ぞと尋申せば在原の業平にて御ざ有と承及て候。惣而か様の御事色々の子細ども有など、申候へども最前も申ごとく委は存もいたさず。およそ聞及びたるハかくのごとくにて候が、存もよらぬ事御尋ふしんに存候。是ハごんごうだんきどく成事をおほせ候物かな。それハうたがふ所もなき小塩の明神にて御ざあらうすると存候。それをいかにと申に、此所に左様の人は御ざなく候が、各く花見に御出を明神うれしく思召かりにあらハれ給ひたるとすいりやう仕候。左様に候ハ、しばらく御逗留有、花を心しつかに御ながめなされ猶もきどくを御らんじて其後御帰あれかしと存候。御用の事候ハ、かさねて仰候へ。心得申て候。

(115)《雲林院》

か様に候者ハ都東山へんに住居する者にて候。いつも春に成候へハ毎每年都きんべんの花の時分をかんがゑ花見をいたし候。当年ハいまだ何方ゑも出申さず候。やうく花もさかりなるよし申候間、先東山へんより花を見めぐり申さばやと存る。いやく先今日ハ我すミかちかき、雲林院の花をながめ申さう。いや是に見なれ申さぬ御方の御ざ候。いかさまゆゑある御方と見申て候が何方より御出被成候へハ此花にながめ入て御ざ候ぞ。是ハ思ひもよらぬ事を御尋にて候物かな。我らも此へんにハ住居仕候へどもつたなき山がつにて候へハ左様の御事一ゑんぶあんないに御ざ候。さりながらはじめて御めにかゝり御尋被成候事を物語申さねハいかゞにて候間、およそ承り及びたるとおり語申さう。先此所をハ雲林院と申候。則是成花を名木のやうに申ならハし候。其子細ハ、もとより花物いわぬいろなれども又申ハ、けいやうげきしかげくちひるをうごかせハ、花の物いふ事も御ざ有かと申つたへ候。いづれも花は同じ名木たるとハ

申せどもむかしの三の人名性の御しやうくわん有て此花を御らんぜられ、様／＼の御哥をよみ給ひ花のさかりにハきせんくんじゆをなしてななめ給いたるにより名木と申ならハし今にかくのごとくにて候。去程に業平のむかしの御事ハミないせ物語にこつきたるやうに承候へハ、申におよばざる事ながら、業平と申ハ忝もへいぜい天王の三ばんめの御子あはうしんわうのすゑの御子にて御ざ有由申候。其御子五人御ざ候中にも業平ハ一ごの間いろごのみにておわしましたると聞え候。委ハいせ物語に見え申候。惣而いせ物語のゆらいむかしよりせつ／＼おほくいづれもぶたうに御ざありげに候。あるひハ業平のミづから我身の上の事をかきしるされたるとも申。其ゆゑハ身ハいやしからすと御入候。又哥ハよまざりけりとも有げに候。其ほか人の存づまじき事をかきあらはして候へハ、たにんのかきたる物とハ見え申さす候。一せつにハ、いせと申くわんによがかきおきたるとも申。其子細ハおきなさび人なとがめそかりころもけふばかりとぞ田蠶もなくなるとよミ給ふは業平はて給ひてのちの事にて候をかき入申候へハ、じきじよとハ申されす候。たゝいせがひつさくたるべきと申方も候。定家のきやうかんがゑさだめおかれ候ところハ、此いまきの名をいせ物語と申上ハいせがひつさくにて有まじきとハ申がたきとの御事にて候。さいぜんも申ごとく委ハ存もいたさす。先我等の聞及びたるとおりハかくのごとくにて候が何と思召て御尋にて候ぞ。ふしんに存候。是ハごんごうだんの事を仰候物哉。さやうの御方とも存ぜず誠にからぬ物語申めいわく仕て候。さりながら是ハ此所にてとりさいたいたすぶんの事にて候が、きんミつと承りて候間、御ゆめに御らんしたるはうたがふ所もなき在原の業平にて御ざあらうする。今一人の上らうハ二条のきさきとすいりやう仕候。それをいかにと申に、金光ハいせ物語に御身をやつ

さるゝと聞及び候。左様の子細により業平もきさきもあり／＼と御ゆめにまゝ給ひたると存る間、申に及、いますこし御逗留あらハ、かさねてきどく成事も御ざあらうするかと存候が、たゝし何と思召候ぞ。御尤にて候。御逗留にて候ハ、かさねて御見舞申さうするにて候。心得申て候。

(116)《伏木曾我》

何と承り候ぞ。ふじのまきがりるとき曾我きやうだいののはて給ひたるやうだい存たらば語候へと仰られ候か。我等も此あたりにハ住居仕り候へども左様の御事くわしくハ存もいたさす候。さりながら人の物語被成たるを承りて候間かたはし物語申さうするにて候。去程に曾我きやうだいの御方此所にて御はて被成たる子細ハあかざは山のかりくらとやらんにてかわづどのをくどうすけつねのしわざにていおとし申され御はて被成候間、くどうすけつねこそおやのかたきなれとてすけなりもときむねもひごろねらい申されどもすきまなくうち給ふ事もなり申さす候間、兵衛のすけ頼朝ふじのまきがりとなさるべきとの御事にて御ふれぢやうまわり候へども曾我兄弟ハ去子細有て御前ゑ御出候事なり申さす候間、御ふれぢやうもなく候へどもしのび／＼の御ともにて候つるが、是も一つハ此折節すけつねをうち給はんとの御事にて御ざ有たると承り候。何がふじのまきがりの事なれば大名小名我おとらじとけつかうにこしらゑ、やかたをひつしとうめて人ごみの事いふもいわれざる御事と申傳へ候が、これをよきついでとねらひ申さるゝところに有山ぞいにてすけつね三つ有しかにめを付てとゞめんと思ひきたるところを曾我兄弟よきところと思ひこしのやをおつとつてつがいよつひてはなさんとし給ふところになんばういたわしき御事にて候ぞ。すけなりのめされたる馬がふしきにゆきかゝりひやうぶをかゑすごとくにもんどりうち

候程にすけなりもおちて馬ともにうゑになりしたゑなり、すでにあやうく見ゑ給ひ候間、時宗せうしに思ひ、すけなりをひつたて申さるゝ。其隙にすけつねハのりこし候間、そこにうち給ふ事もならすしてむなく帰り申され候。さりながらふかき手指にてすけつねがやかたの内ゑしのび入給へどもすけつねようじんしてところをかゑふし候を、よき安内しや有て、其所ゑしのび入、きやうだいしてやすくとすけつねをうち御申有。うれしく思ひ、ねんらいのかたきこそうちたるとしてのびてやかたを御ひき候ところにすけつねの御とぎに大とうないと申者候つるが、たうぎにハにけのびて程へたててこゑをあげ、今夜の夜うちハ曾我兄弟の人ゝなり。かまひて後日にあらそい給ふな。其せうこに大とうないにて候ぞとよばハり候を兄弟の人ハにつくきやつめがくちな。いて物見せんといふまゝにたちかゑる。大とうないをうちとめむかふ者をやらすござすうちころしひるいもなきてがらをめされすけなりハたうぎにうたれ給へども、時宗ハ頼朝の御ざどころさして御出候ところをいけどりに仕り、それもちうし申され候間、兄弟ともに此所にてはて給ひて候が、只今ハ何と思召より御尋にて候ぞ。ふしんに存候。是ハごんごだうだんふしぎなる事を承り候物哉。扱ハそれがしのすいりやうにハうたがふ所もなき曾我兄弟の御ゆふれいにては御ざ有べし。それをいかにと申に此世にてもならびなきなかのよき兄弟にて有たる由承りて候間、のちのよまてもはなれすましますと存候間、御跡を念頃に御弔被成候ゑ。左様に候ハ、かさねて出らるゝ事も御ざあらうすると存候が、たゞし何と思召候ぞ。ちかごろの御事にて候。御逗留にて候ハ、かさねて御見まひ申さうするにて候。心得申て候。

(117)《猩く》

か様に候者ハもろこしかねきんざんのふもとやうずの里に住居する者にて候。爰にうとく成者の候が、毎日やうずの市に出てさけをあきなふ者の候間、我等もあれゑ参毎日酒をかうてたべ候が、今日ハかなわざるやうの事候て、おそく出申候間、急で参りさけをたべ申さばやと存る。シカく有。扱それハいかやうなる事を御尋被成度候ぞ。是ハ思ひもよらぬ事を御尋被成候物かな。我等も此あたりにハ住居仕り候へども左様の事を念頃にハ存ぜす候。さりながら我等の聞及びたるとおりを物語申さうするにて候。去程に猩くと申て候が、足手かしらなどハ其まゝ人間にて有と申が毎日この市に出てさけをかいのむハ人間にてハなし。彼猩くとなり。又猩くとをとるハ、つばをおきさかづきを其あたりにおきてしだいにようところを、つばの上にさかづきをおき申候へハ、かしこき者とハ申ながら、されどもちくしやうのかなしさは、だます事ハゆめにもしらす。ことのほか悦び、あたりにまちかけいるをもしらすそろりくとはしりより、彼つばのあたりを見まわり、扱其後につばのうゑへあがり、さかづきをとる思ふまゝに酒をのミゑいふしたるところを其まゝとらへてそれをころし、扱猩くのちをとる物をそめ申候。其猩くのちにて物をそむるゆゑに猩くひと申候。さりながら猩くくにさけを御のませ候ハ、しだひくにふつきのゑと御なりあらうするハうたかひもなき事にて候間、いよくさけをあたゑ、かの猩くを御待あれかしと存候。左様に候ハ、先我等ハ罷帰り、かさねて御見舞に参りやうすを見申さうするにて候。心得申て候。やれくめづらしき事を承り候。是と申もふつきに御成あらうするすいさうにて候間、いよくさけを御たゝゑ有彼猩くを御覧あれ

かしと存候。

(118)《諸社》(せりふつねのごとく也。)

去程にたう山ハはんしう諸社の山と申。其子細ハ我朝のはじめ天神七代の尊いざなきいざなきの尊の御子に日神、月神、ひるこ、そさのをの尊。中にもそさのをの尊と申して御さ候があくじんにて御入候。地神第一に天照大神そなわり給ひ候へハ、御代をひるがゑさんため大和国宇多の郡にじやうくわくをかまゑ、一千の劔をそろゑてたてこもり給ひしを天照大神則けやふり給ひ候により千の劔をやふると書てちはやふるとよませ給ひたる御事も此時よりはじまりたると承及て候。然ばそさのをの尊ハ出雲国に御下向候が先当山に御ざ候て御かりをめされ候とてさうかいまんく^{ママ}とたゝゑうしろにハかうかんみねをかさね山たかふしてじやうくぼだひをあらわしたにふかうしてハ下化衆生のことわりを見せ、誠ふだらくせんの有様もかくやとこそ有らん。末世むひにいらいにてあらうするとほめ給ひ候により則尊の名をかたとり、やがて諸社の山と申。惣而此山ハふだらくせんほくゑんきやうのミネつうじて此所かくのごとく有由申。ことさら是成桜ハ則御本尊と一躰分身の桜にて御ざ候由承及て候。それにより天人一日に三度づつあまくだり給ひ、かう花をそなへ供養らいはいをなし給ひ候と申傳候。去間春にも成候ゑハ、きんべんの人く^{ママ}ハ当山の桜をと申され候。皆く^{ママ}御あがめ有て桜をはひし奉り候。其外しゆく^{ママ}さまく^{ママ}の子細御ざ有けに候へども念頃ハ存せず候。先我等の承りたるハかくのごとくにて候。

(120)《信夫》(せりふつねのごとく也)

信夫が原におゐてむかしより合戦たびく^{ママ}御ざ候。中にも八幡太郎よしゑあべの貞任を御たいじの御時此所にて花やかなる御合戦有しに、すでに城の太郎殿御方まけいくさと見え申候間、大きにい

からせ給ひ、さすが名大将成ハ、いつまで爰にながらうべき。一命をかるんじいくさして名を後代にのこさんと、よきかたきとおほしき仲ゑかけ入よき大将とむんすつくみうゑえなりしたゑなり給ふいきおひは、しゝとらもかくやとめをおどろかすところに、かたきならうどうおちあひて、太郎殿のくひをとり申候。然共かたきをかうち給ひ、たがひに御はて被成たると承て候。又西行法師おくゑ下り給ふ時此橋ハいかやうなる橋ぞと御尋あれば、ざいしよの者これハさゝやきの橋とこたゑ申候。

(119)《獅子》(せりふつねのごとく也。)

惣而大しやうもんしゆのありかだき子細ハ、しよしうともに佛道しゆぎやうし給ひ、じやうぶつとくだつのゑんとなり給ふも。ことく^{ママ}く^{ママ}大しやうもんしゆの大はからひと承候。それよりさんぜのがくもんとハ申候。又当寺のもんじゆ獅子めされ候ゆへは、天ぢくにてうてんわう何とかし給ひけん、しゝを取はなし給ふ。然はしゝはいきおいのつよき物成ハこくうにはなれ、行方をうしない給ひて候。誠にしゝと申物は、かけいださんとする時ハ、身の毛をたてゝ心もことばもおよばすおそろしき者にて候。さあるに依てきやうせつにもしゝふんしんとおかれたるよし申。うてんわうとりはなし給ひたる事をくやミ天ぢくのことハ申に及す。きらいかうらいまでも尋給ひ、ついに尋出し給ひたると申。惣而此所におゐてとりきたいたすふん、大方我等の承り及たるハかくのごとくにて候。

(飯塚注・(120)《信夫》は(119)《獅子》の前)

(121)《草薙》

是ハびしうあつたの明神に仕ゑ申社人にて候。只今此所ゑ出る事よのぎにあらず。ひゑい山に御ざ候ゑしんの僧都と申てたつとき御僧の此程当社ゑ御参り有て、一七日さんらう被成、さいせうわうき

やうとやらん申御経を御どくしゆ被成候が、やがてけちぐはんにて御ざ有よし申候間、御経をもとくしゆ申御礼を申上ばやと存る。御礼申上候。是ハ当社に仕へ申社人にて候。有がたき御経を御どくしゆ被成候由承、御礼をも申御経をどくしゆ申度存罷出て候。中くの事。当社に仕へ申しやにんにて候。かしこまつて候。扱いかやう成御事を御ふしん被成度候ぞ。何と当社に仕ゑ申者ならハ当社のじんび存ぜぬ事は候まじい。くわしく語と仰られ候か。是ハ大事の事を御尋にて候。我等も年久しく当社に仕へ申といゑどもさやうの神びなとたとゑ存たるなと、申てもあさしくハ申されぬ事にて候。いわんや我等くハしく存ぜず候。乍去はじめて御礼申上御尋候事を存ぜぬと申事もいかゞにて候間、むかしより申つたへたるとおりあらく語てぎかせ申さうするにて候。去程に当社明神のいにしゑかミよの御時ハそさのをの尊出雲国に御ざ候ひしに、其折ふし、ひのかわかみに、てなづち・あしなづちと申夫婦の者うつくしきひめをいだきてなげき候を、何事ぞと御尋あれハ、此所に大蛇の有にいけにゑをそなゑ申が、今度ハ此いなだ姫がばんにあたりたる程にふびんに思ひなげくよしを申。尊きこしめし、其ひめを我にゑさするならハ、大じやのなんをのがすべきとごぢやう有。老人悦びひめを参らすべきよし申ししかバ、尊聞召、たばかりごとをめぐらし大じやをさけによわせゑいふしたる所を御をもつてすんくに御きり被成、其尾を御きりあれハ、劔のやきばしらミきれかね候程に、ふしんに思召、尾をわりて御らんあれハ、一つのつるぎ御ざ有たるを、むらくものけんと名付給ふ。其仔細ハ、つねに大じやの尾の上に村雲がかゝりたるゆゑに村雲のけんと名付られ、大神宮ゑ参らせられしを、此所にこめおかれたると申。又仁王の御代と成てハ、十二代けいかう第三の王子大和だけの尊とげんじ、とういのゑひすを御た

いじの御とき大神宮の御じげんをもつて其じげんをもくだし給ふ。其折節出雲の国にて御たいじ被成たる大じやのしうしん三かわの国にて御みちふさぎ候をかけやぶつて御とおり候間、大じやいをうしなひ、それより二村山となりたると申。左様に候て駿河の国かんばらまで御下り有し。其頃ハ神無月の事なるにとうい十万よきかぶとをぬぎほこをふせかうさんし、尊をたばかり出し、ゑひす四方のかこみをなし、かれ野の草に火をかけ、時をつくつてせめ候程に、尊彼つるぎにて四方の草をなぎはらい給ひしかハ、ミやうくわハかゑつてゑびすのちんをやきほるぼし、ことくくうせたるに依て、村雲のぎよけんを草雉のけんとも名付られたると申。さあるに依てしんけんを守りの神とかうして大和だけの尊を当社の神とあがめ奉り、いにしゑのてなづち・あしなづちハ今の源太夫の神と現じてとうかいたうを守り給ふ。又いなだびめハたち花ひめとあがめ奉り候。惣而最前より申ごとくくハしくハ存もいたさす。我等の承たるハかくのごとくにて候が、只今の御尋ふしんに存候。是ハきどく成事を仰候物哉。扱ハそれがしのすいりやうにハ、うたがふ所もなき大和だけの尊。たち花姫あらハれ給ひ、御ことばをかわし御申有たると存候。それをいかにと申に、有がたき御経を御どくしゆ被成候により、あらハれ給ひたると存候間、おこたりなく御経を御どくしゆあらハ、かさねてきどくをあらハし給ハふすると存候か、何と思召候ぞ。ちかごろにて候。我らもかさねて御経をどくしゆ申さうするにて候。

(122)《泣不動》

しやうちうゐんののふりきと御尋は、いかやうなる御用にて候そ。何と承候ぞ。御客僧ハおんじやうじはしめて御一見の御方にて候が、当寺におゐてしやうちうゐんの泣不動と申てかくれなき不

動の有ときかせられたる程に、泣不動と申しわれ、存たらハ語てきかせられ度と承り候が。是ハ思ひもよらぬ事を御尋にて候。此寺ののふりきと御申候間ふつと罷出て候。我等もしかゝとハ存ぜず候。乍去明王の御事聞及せられてお尋にて候に、此寺に有ながら、存ぜぬと申ハいかゞにて候間、大方物語申さうするにて候。去程に、当寺におゐてしやうちうゐんの泣不動と申ハ、おんじやうじのくわんしゆちこうないくうといゝし人、きやうこうとしふり法力たつてやいはいのけんそうと名を付給へる御かたなり。しかれどもおひすでに時いたつてめいおわらんとせし程に、五しゆの大ぐわん有しにいまだかずをわらされハ、命はて給ハん事あまりになけかわしき御事なれハ、せうくうといゝしにそう師弟の命にかわり此くわんをはたさせ申やうにとおもわれて明王の御前に参り、ねがわくハ我等が命をめされ、ないくうをたすけてたび給ゑとてかんとんをくだききねむ申され候處に、其ののぞミかない申。ないくうの御心ハかろくなり給ひ、月日のかさなるにしたがつて本復し給ふ。さ有に依て、せうくうしぼめる花のごとくにて、がんしよくかわつて今をかぎりで見ゑ給ふ處に、ししやうを大事におもわれみがわりに立心ざしを誠にあわれと思召、明王まくらがミに立給ひて、此度ハなんじをたすけ給ハんなり。しかれどもちやうごうをてんする事、ほとけのわざにもかなわねば、三世れうだつのひぐわんにてなんじを只今たすくるとて、こゑいのまなこに涙をながし給ひてせうくうかconsinににりかわり御たすけ被成たると申。なんぼう有がたき御事にて候ぞ。泣ふ動と申ハ、せうくうししやうの命にかわらんと思ひ我にいのりをかけたる心ざし、明王しゆしやうに思召れ、涙をはらくと御ながし有たるに依て、しやうちう院の泣不動と申てかくれもましまさぬ御事にて候が、扱只今ハ何のゆゑになきふだうのいわ

れ御尋にて候ぞ。ふしんに存候。是ハかゝるきどく成事を仰候物かな。それハうたがふ所もなきこんからせいたかのうちにて御ざあらうすると存候。さやうの事もたゝおきやくそうたつとく御さ有に、ことさらこまのたんじやうにねんじゆしてましゝたると承候間、たちまちきどくを見せ申されたとすいりやう申て候。おきやくそうも左様に有つべしと思召ハ、猶ゝ御逗留有、いのりかぢあらハかさねてきどくなる事の御ざあらうすると存候間、信心わたくしなく御きねんあらうするにて候。それハちかごろにて候。御逗留の被成候ハかさねて御見舞申さうするにて候。心得申て候。

(123)《求塚》

是ハいくたのさとに住居する者にて候。此間ハ何方ゑも罷出ぬ程に今日ハいくた川のあたりゑ参り心をなくさまばやと存る。久敷爰元ゑ参らねばあらたまりたるやうにおぼゑて一だんとおもしろう候。いや是にお僧たちのやすらうて御ざ候。是ハいづくより何方ゑ御出候得ば、此所にやすらうて御ざ候ぞ。(シカゝ)去程に求塚と申ハいにしゑ此いくたの里にうないおとめと申人の御さ有たるか、其頃いづミの国・しのたと申所にちぬのますら男と申人の御ざ候。又此所にささだと申おつとの御さ有しに、彼うないおとめを兩人のおつと見申て二人ともにこひ奉り、文・玉つさのいろをつくしおとめの方ゑつかわし候處に、日こそおほけれ、二人のつかひ同じ日の同じ時に参りあひ候間、おとめハ二人の文を急てひらきて見れハ、なんほうきどく成事にて候ぞ。兩人のぶんてい同じことくにて有たると申。彼女兩人の方への返事を何といたし候ハんとあなじわづらひ母に此事つゝまず語申せハ、二人のおやの申やう、とかく此上ハぜひなき事、我をおほしめさハ、二人ともにいくた川に御出有、水鳥をあそハし候ゑ。此方よりやつばをさしてあたりたるかた

ゑなひき申べしと有しかば、二人の者いそぎ来り、いくた川に出候程に、もとより女も女のちゝはゝも罷出見物いたし、やつぽをさして一つの鳥を二人一度にやを御はなちあれと申けれハ、我おとらじとねらいより、二人一度にはなつ。ふしき成事にてハ御ざないか。二人のや一つの鳥の左右のはがいにあたり候間、兩人の中心いよく同じおもひと見ゑ申候。ちゝはゝも是を見てあきれはてとかくの事をも申さす候處に二人のおつとをもおやをもかゑしおき、扱彼女思ふやう。か様の事もぜんぜのあんぐわたるべし。此上ハ命有てもせんなしとして、一しゆのうたをよミおき、いくた川ゑ身をなけむなく成て候。其時のうたハ、思ひわび、我身すてけん津の国のいくた川はなのミなりけりとよミおきあいはて申候間、ちゝはゝおどろきしがいをとりあげつかにつぎこめなけき申事かきりなく御さ有たると申。やゝあつて女のちゝはゝの方よりかくのごとくと申候得ハ、二人の者どもきもをつぶし急此所ゑはしり来り、か様にむなく成事も二人の者のゆゑなれハ、此世に有てもせんなしとて彼女のつかのまへにて二人さしちがゑむなく成て候間、女のつかの右左に二人のおつとをつぎこめておき、もとめたるつかなれハとして求塚と申候。其時此所のさゝたが塚ゑハかたなをつぎこめ申たるが、ますら男がつかゑハかたなを入す、其まゝうづミたると申。其いわれかある時たび人ゆきくれ、つかのほとりにて一夜あかし候へハ、いづくともなく男一人ちにひたつて来り、たび人のたちをすこしの間御かし候へ。ねんらいのかたきをうち、本意をたつし申べきと申間、むしんながらたちをわたすと思ひてあれば、やがて彼男参り、御太刀にて本意をとげ忝候と申かと思へハ其まゝうせて候程に、ふしんに思ひ夜明ミれハ、ますら男が塚の上に太刀がちにそミて有たると申。扱ハ彼者どもじやいんのがうによりしゆらのくをう

くるかとの申事にて候。我等もくハしくハ存ぜず候。先およそ承りたるハかくのごとくにて候が、何と思ひよりて只今ハ御尋にて候ぞ。ふしんに存候。是ハこんごうだんきどく成事を承候物かな。扱ハ我等のすいりやうにハ御僧たつとくましますにより、只今我等物語申たる者あらはれ出て、御弔ひにもあづかりうかミ申度存、こゑことをかわし申たるかとすいりやういたして候。それをいかにと申に、前々のがうゑんの道理によりあゑなきはてやうにて候間、一入つミもふかからうとすると存候。左様に候ハ、しばらく此所に御とうりう有、かの者のあとを弔ひうかめて御とおりあれかしと存候。御用の事候ハ、かさねて承り候へ。心得申て候。

(124)《鐘馗》

か様に候者ハ、此山のふもとに住居する者にて候。此程の天氣しかくゝと御ざなきによつて薪をもとらせ申さす候。今日ハ天きもよく候間、山ゑのぼり所をも見はからい、薪をとらせ申さばやと存る。内の者まかせにいたせハ、用木もきつて薪に仕る間、我等の見まふて申つけうと存る。いや成御方ハ此あたりにてハ見なれ申さす候がいづくよりいづかたゑ御とおりなざるハ、此山中にやすらうて御ざ候ぞ。是ハ思ひもよらぬ事を御尋候物かな。我らごときの者ハ左様の事ハ存ぜず候。さりながら御尋なざるゝ程に、存ぜぬと申もいかゞなれハ、かたはし聞及びたるとおり物語申さうするにて候。去程に、鐘馗と申たる御方は、せうねんの時よりもがくもんに御すきなされ、あけくれけいせつのまにむかひ、いとまくなされたるによつて、何事にもくらき事ハ御ざなかりたると申。さあるによつて、其かミたいその御時、其所のしんしにゑらみいだされ、きうだひのためていとおもむき給ふ。しかれども其時のしやわせいかに御ざ有けん。きうだいかなわす。すでにらくたいにおよ

び給ひければ、鐘馗のおほしめすにハ、きうたびかなわす。ひごろのがくもんまでもむになる上ハ、命有てもせんなしとて、かうべをうちくたきむなしくなり給ひたると申。此事じやうぶんにたつしければ、其こゝろさしをゑいかんあつて、忝もりよくほうをしがい給ハつて、都の内にはうむり給ひたると承り及びて候。誠や人の申ハ、鐘馗のためにハきうだいを御しすましなされたりよりハイやましのやうに今におみて申ならハし候。惣而さいぜんも申ごとく念頃にハ存もいたさす。まづ我等の承りたるハかくのごとくにて候が、只今ハ何と思ひより存もよらぬ事を御尋なされて候ぞ。ふしんに存候。是ハきどく成事をおほせられ候物かな。惣而此あたりに左様の人ハ御ざなく候が、是ハうたがふ所もなき鐘馗の御ぼうしんにて御ざあらうすると存候。かた／＼も左様に思召ハ、しばらく此所に御逗留有、かさねてきとくを御らんあれかしと存候。それはちかごろにて候。御逗留にて候ハ、何事にて御用の事承らうするにて候。心得申て候。

(125)《松虫》

是ハ津の国天王寺に住居する者にて候。今日ハあべ野の市にて候程に、さしたるうり物ハなく候へども、市に出てけんぶついたさばやと存。ことにしる人の候間、急て参りさけをもたてなくさまふと存じて候へども、かなわさる用の事有ておそく罷出て候。扨々今日ハ思ひのほかなる市のたちやうにて一だんとにぎやかに御ざ候よ。いかに申。いつもより今日ハ一入にぎやかに候。其事我等もさう／＼参りさけをもたなぐさミ申度存て候へどもかなわさるようの事有ておそなわり申て候。去程に、こゝにふしぎ成事の候。只今はよりうつくしきわかしうとおぼしき人のねりがさをめして御出候程にかさのうちを見申さうすると存て候得ハ、其まゝ、かさをかたむ

けておとおり有たるとおもふたれハ見うしなふて候が、人の申候ハ、いつも是ゑ市ごとにわかしの御出候由申候が、何とてさやうの人の御出ならばそれがしがやうなる者も御よび有て御さかづきをもたまわり候ハぬぞ。あまり心づよき御事にて候ぞとよ。それはふしぎ成事にて候。扨それならハ我／＼承り及たる事の候。あら／＼語てきかせ申さうするにて候。いにしへ此所にきようこつがら人にすぐれたるわかきおとこの二人有しが、よにたぐひなくなかのよき事申はかりもなく、ともなひてゆき、春の花、秋の野とや何事につけても申合候間、世間よりも、やがてかわらぬともと名付、せじやうにかくれなきやうに候間、いよ／＼水のそこまでもちぎり、此よの事ハ扨おきぬ。しなば一所同じまぐらにとちぎりおきたると申。去程に有時彼二人の者此はらをとおり候處に、一人松虫のねにきゝ入てしたひゆくを、今一人ハたちとゞまり、つれだちてもゆき申さす候。それを思へハ二人ともにあいはずべきゆゑやらん。一人むしのねにしたひゆくを、一人とゞまりいまやおそしとまちいたれども帰らざる間、あまりにおそくきたるをふしんに思ひ、わけいり尋ぬれハ、何のゆゑともしらす有所にむなしくなりてうちふし候程に、おどろきさわぎ、ごんごだうだんの事かな。しなハ一所同じまぐらにとちぎりおきしに、扨ハ我をすてゝか様に成行事申べきやうもなきとてりうていこがれ候へどもむなしき道になりはてられ候間、ぜひなき事にて有。年月のちぎりおきしごとく三つの大河にてまたれ候ハんに、一度にこそむなしくならずとも、やがておつつき申さんとて、今一人のともゝむなしく成て候を、みな／＼よにあわれなる事と申。二人ともにつかにつきこめ、今におみてかわらぬとももの事ハかくれもなきやうに申傳候。思ひまわせばあわれ成事にてはいなく候か。先かわらぬとものはてられたるやうだひハかくのご

とくにて候よ。扱ハ左様の子細により、かわらぬともの事を御尋にて候か。ごんごだうだんの事を承候物かな。扱ハうたがふ所もなきかわらぬとものゆふれいにて御ざあらうするとすいりやう申て候。あまりにいたわしき様躰にて候間、御法をなしてかわらぬともの跡を弔て参せられよかしと存候。それハちかごろの事にて候。やがて御弔あらうするにて候。我等も御見まひ申さうするにて候。心得申て候。

注

(1) 『国書総目録』第六卷 岩波書店 昭和四四年四月発行 四六一頁

(2) 本稿に先行する翻刻(拙稿『椋山女学園大学研究論集』第四六号人文科学篇 平成二七年三月発行 二七―五〇頁)において「今回第二冊目」としたが「第四冊目」の誤りである。

補記

貴重な間狂言本の閲覧・翻刻を許可下さった和泉流狂言方佐藤友彦師に心より感謝いたします。本稿は平成27年度科学研究費助成基盤研究(C)「東海地域近世・近代能楽資料の収集・整理とアーカイブ化」(研究代表者:飯塚恵理人、課題番号:26370216)による成果の一部となります。

* 文化情報学部 文化情報学科